

編集後記：昨年12月、受験生達がラストスパートをかける中、某学習塾が作成した中学受験の時事問題予測という資料を見せて頂く機会がありました。理科の欄を眺めていると、「トランプ1」惑星系の地球型惑星発見（2017年2月）、探査機「カッシーニ」の土星大気圏突入（2017年9月）、アメリカ横断皆既日食（2017年8月）、太陽フレアの発生（2017年9月）など天体ショーや宇宙開発に関するトピックが目立つ中、ひまわり9号の打ち上げ（2016年11月）、「パリ協定」発効（2016年11月）、沖縄のサンゴ礁の白化現象（2017年1月）、西之島の噴火（2017年4月）、男体山の活火山認定（2017年6月）、九州北部豪雨（2017年7月）、台風5号の長寿記録（2017年8月）、台風18号の九州・四国・本州・北海道上陸（2017年9月）、メキシコの巨大地震（2017年9月）といった気象や自然災害に関わる項目も多く見られました。小学生がこれだけ多岐にわたる（上記はほんの一部。社会科はさらに多様です）時事テーマにアンテナを張り巡らしてい

なければならない現在の受験事情に驚きつつ、かろうじて自分にも思い起こすことができる内容だったのでほっとしましたが、出題例を見てさらに驚きました。長寿記録となった2017年8月の台風5号については、発生してから消滅するまでの時間が聞かれています。答えは19日0時間。九州北部豪雨については、「Q：積乱雲が次々と発生して一直線に発達し、長さ50～300 km 程度、幅20～50 km 程度の範囲に雨を降らせるような雨域のことを何と言いますか」。答えはもちろん「線状降水帯」。気象に関わる者にとってはよく知る用語ですが、メジャーになったのはここ数年です。気象業界が生み出した用語が、重要事項としてまだ幼い子供達の頭に刻まれるという事実に触れ、今後話題性の高い気象現象に対して命名する際には、子供から大人まで、誰にでも扱いやすい表現を心掛けたいものだと感じました。

（今田由紀子）